

宇治茶祭り現場の争点と志向

鄭書京[※]

1. 端書き
2. 日本宇治茶祭りの動向
3. 宇治茶祭り現場の争点と志向
4. 韓国茶文化祭りの問題点と方向性模索
5. 結語

1. 端書き

韓国の場合、全国的に茶文化享有人口の拡散といっしょに各地域の茶文化祭りも量的に大きく増えた。代表的な茶産地としての寶城と河東をはじめとして茶文化傳承地域である全南と全北そして慶南と慶北地域が大勢だ。最近になって茶生産の北方境界線が崩れながらその規模は実に全国単位で拡散した。全南地域でも韓国の茶聖草衣禪師の茶情神を崇拝しようとし、出生地である務安と修行先である海南が茶文化祭りの代表的開催地だ。このような地域をはじめとして井邑、益山、全州、慶州、南揚州、金海、釜山、光州、開慶、など多様な祭りが開催されているし、ティワルドフェスティバルや世界茶文化祭りという名目でソウル、光州、大邱、釜山など20ヶ所あまりの場所で開催されている。

しかしこれらのような祭りは開催意義と目的はそれぞれ異なるように標榜しているが祭りのアイデンティティが曖昧で、志向する開催目的や象徴性の弁別力が非常に稀

薄なのが大きい問題点に指摘されている。茶が中心である祭りにもかかわらず茶文化祭りの核心が何なのか把握しにくいし、各地域の茶文化の特性をいかすことができない現実である。なおかつ開催時期も5月に集中されており各地域の創意性を現わすことができない。また、春茶製茶時期に各地域ごとに祭りが開催されており、選択の幅が非常に狭いという限界も見逃すことができない。

各地域茶文化祭りのプログラムも重複される場合が多く、地域的情緒を反映することができない。例えば空間的イメージをいかすことができなく問題はもっと深刻である。このような韓国の茶文化祭りが先人たちの正しい茶情神を奉ずるためには具体的な分析と今後の方向性模索が要求される。そのため筆者は日本の場合茶文化祭りがどんなに進行されているのかその現況を察しようとした。日本の茶文化祭りの中で茶情神を信奉して茶の特性をいかして今まで模範的な進行をして来ている宇治茶祭りを調査研究対象とした。宇治は茶が中心になっているし茶の製茶そして茶の品定め、茶の精神的機能を持って祭りのモットーにしているし1年の内に3回祭りを進行することで地域のブランド価値創出のために努力している。そのため日本の代表的茶文化祭りである宇治茶祭りを調査分析して見ようと

※韓国木浦大学教育革新開発院研究教授

する。

茶文化祭りの準備過程と運営、進行と手続き、祭りが志向する精神性と地域共同体の活躍をよく見て韓国茶文化祭りの現段階位相を点検して今後の方向性を模索するための足場を用意することになると判断される。日本茶文化の本領と実用の問題、祭り運営の範疇と傾向、分岐点検討をすることで過去と現在を整理してその性格と位相を検討して未来の見込みを提示することを目的とする。現場調査を通じて韓国茶文化祭りが抱えている問題点と今後の方向性を模索して見るきっかけになると見られる。

2. 日本宇治茶祭りの動向

宇治市は、京都府の南部に位置して、世界遺産平等院、宇治カズワサや宇治上神社と宇治茶で知られた市である。西方に小倉池干拓地があって、現在は農地と住宅街になっている。小規模の都市と田舎があって早くから合併の機運があったが、第2次世界大戦後、地方自治制の権限の拡大によって教育や警察などの財政負担がより大きくなったため、合併に向けた機運の高まり、都市開発研究がさまざまな立場から行われた。

朝鮮戦争が勃発した1950年から宇治茶文化祭りを開催して今年で62回目となる茶文化祭りを進行してきた。宇治は日本で一番の高級茶を生産している茶産地で宇治茶の茶業開発によって市内の茶農地は減少しているが、茶場の仮名の大部分が市内にあるなど、伝統的な産業になっている。宇治では公立の小中学校でお茶に関係する地域教育が実施されている。その一環として校内

の蛇口から茶が出る「湯飲み場」が設置されており、学生生活にお茶が活用されている良い例を見せてくれる。

このような宇治の茶文化祭りの歴史はその準備過程と運営、進行と手続きで私たちが知行しなければならない徳目たちを取り揃えていると思われる。祭りが進行される全過程を通じて私たち茶文化祭りの模範を搜して長年の茶文化祭りの代表的な事例として私たちの茶の進む方向を提示することで所存される。

筆者は毎年韓国の茶文化祭りの現場を尋ねて調査分析をおこなった。祭りの関係者をインタビューし、進行される手続きと過程を記録と映像に残した。また、作業の一環で日本の宇治の祭り現場調査も並行した。宇治茶祭りを調査するために2010年2012年に日本を訪問した。2012年訪問は我が国で初めて茶人会を結成し、今までおよそ50年間韓国茶文化の地主役目をして来た海南茶人回会員たちと一緒に訪問し、宇治茶文化祭りの現場と上林家の14代である上林春松氏に会ってインタビューした。上林春松氏は去年まで宇治茶祭り実行委員会会長を歴任していた。日本の宇治茶祭り現場調査と祭り進行を担当する実行委員たちのインタビューなど以上の調査資料を土台として研究を進行する。

1) 日本宇治茶祭りの志向

南北朝前期から中期においては梅尾茶を引き継ぐ存在に過ぎなかった宇治茶だが、足利義満の庇護の下に発展の時代を迎えて南北朝末期から15世紀中盤にかけて眩しく発展して来た。一条兼良が書いた『尺素往来』

には「宇治は当代近來の自慢」と表現されている。1564年(永禄7年)、宇治七名園が成り立って「分類草人木」にその存在が記録された。戦国時代1574年(天正2年)3月27日織田信長が奈良への下向途中に宇治に立ち寄って、茶葉摘みと製茶の風景を見物した。織田信長は茶師の森彦右衛門を御茶頭取として宇治郷の支配を命じて森彦左衛門は織田信長の死亡まで宇治の茶業界で重要な役目を担当するようになった。

千利休は津田宗及、今井崇久を引き継ぐ立場の茶頭だったが、織田信長死後に豊臣秀吉に抜擢されて「天下第一の茶湯者」としての地位を固めて単純な茶頭を過ぎる存在になった。利休は宇治茶業界の統制に力強い姿勢に臨み、上林家と協力して宇治茶の地位向上に力をつくした。上林家は1558～1569年(永禄年間)創業して450年になった。宇治茶業界が危機に直面した時豊臣、徳川家による茶道の普及とともに復興し、宇治茶の代表格になった。

江戸時代は「御物茶師」(ごもつちゃし)として宇治を代表した。1952年(昭和27年)に有限会社になった。有限会社上林春松本店(かんばやししゅんしょうほんてん)は京都府宇治市にある茶問屋でもある。創業永禄年間、現在の主人は14代上林春松だ。茶の加工と販売を主な事業として、茶道家の家に茶を貢納する外にデパートなどにも売り口を持って、ウェブ上でオンライン販売も実施している。多様な商品は、粉のお茶、玉露から葉茶までを取り揃えている。製茶工場では見学を受け入れている。また、宇治市の宇治橋校周辺に「宇治・上林記念館」を開いて、茶の資料や製茶道具を公開して

いる。建物自体も歴史的なのだ。

宇治茶は鎌倉時代から生産品になっており、室町時代には幕府を始めとして、室町幕府の有力武将によって茶畑が設置された。戦国時代には覆下茶園によって日本を代表する高級茶の地位を固めて江戸時代には幕府に献上品の茶団地(茶壺道中)が「宇治から江戸までつながる茶団地(茶道中)で有名である。

室町時代と鎌倉時代初期日本に喫茶の習慣を広く知らせた栄西は、宋から持って帰って来た茶種を「漢柿蒂茶壺」に入れて明恵に送った。明恵はその茶種を梶尾深瀬の地に植えて、その後宇治の地にも播植した。13世紀中盤、後嵯峨天皇が宇治を訪問したことを機会に平等院に小松茶園、木幡に西浦茶園茶畑が作られ、日本で本格的に茶の栽培が始まった。南北朝時代には梶尾で生産された茶を<本茶>と言う。醍醐や宇治の茶は満ちる非茶と呼ばれる。初めは本茶と非茶を比べて合わせる遊びだったが、多くの種類から数十種類の茶を比べて合わせる遊びに発展した。他の産地とは違う香りと味を持った茶を生産しようとする傾向が著しく、多様な産地の茶が生まれる要因となった。1374年(安8年)、豊原新秋街悟って王院僧正に宇治茶を献上したことが「新秋期」に記録されており、「宇治のため」と言う名前が誕生した。

宇治市が大きくなるようになった地域の合併にも満ちる重要な機能をした。結局特産品である「宇治茶」の振興を一体的にはかることができることなどが決定的手段になって、1951年(昭和26年)3月1日、各村々が合併して宇治市になった。宇治茶は宇治

市の財政面など自治体運営の合理化に大きく寄与している。2011年から実施している「第5次総合計画」では、「第1次総合計画」から含まれている「新緑が豊かな、暮したい、暮して良かった都市」と言う都市上を基本理念にしている。

宇治茶祭りは1年に大きく三度日付を異にして行事が進行される。チャサンジとして茶を取る行事が立春から数えて88日になる日行われ、他の茶を保管しておいてから、宇治茶祭りの時封切りし、茶の大人たちにその茶を撃拂してあげる行事として宇治茶祭りが毎年10月第一日曜日に行われる。言わば秋祭りの慈しんで見祭りを準備祭りで開催する独創性がある。皆多い茶人たちと観光客たちに興味と茶に対する正確な情報を習得する機会を提供する。宇治茶故郷作り協議会ではお茶がおいしくなる10月～11月に宇治茶に対してもっと分かって、楽しんで、味わって、宇治のための魅力を満喫する組職を作った。平成18年度から＜宇治茶の創月間＞を決めた。山城地域の各地では宇治茶を楽しむ多くのイベントを開催している。①お茶の葉取る行事(茶摘みの集い) ②春の台次回(春の大茶) ③宇治茶の祭りがそれである。

2) 宇治茶祭りの進行と手続き

宇治は立春から数えて88日目の1日目、京都府宇治市で宇治新茶88夜お茶の葉摘みの集まりがある。88日夜に取った茶が一番立派で、この日にお茶を飲めば長生きすると伝わっている。京都府茶協同組合茶業センターの茶畑では、着物身なりの明紬着物を着た女性たちが若芽を丁寧に取ってかご

に入れることからこの祭りは始まる。初春は低温が続いて生育が心配になるが、88日目になる日気温の高さは茶の香りも色も一番良い状態になると伝わっているが、これは科学的な試験結果を通じて立証された結果である。毎年決まった日付に進行される。このような精神が宇治を日本第一の茶の産地として支えている。

宇治茶祭りは宇治の宇治橋から宇治茶祭りが始まる。先に宇治橋の中『三の間』と言う献茶に使用する水を汲むことがその一番目の行事である。この3人禪師の間には、足を守るという女神神社(橋神社)がいた。宇治川は名水として知られており、歴史的に茶人たちに人気がある水である。戦国時代、秀吉もこの宇治川で水を汲んだと言われており、毎年この橋で水を手に入れて茶を抜いて茶の大人たちにその年の茶をよく撃拂してあげる厳肅で敬虔な行事である。

① 橋の上でお祓い・清めをした後、橋の上から、縄を縛って付けた釣瓶を下る。これを三度位繰り返してすくい上げた水を竹桶に注いで汲む。この時すくい上げた釣瓶でそのまま支柱の上に準備しておいた竹桶に水をこぼして盛られるようにする。それにその通から他の入手する。

② すくい上げた竹桶に盛った名水を興盛寺まで持って行く。その行列が約1時間(約4km)位つながる。宇治橋で平等院を向けて宇治川にある二つの島塔の島と橋島を経由して興盛寺に移動する。平等院前大通りの塔と島を縛る橋「喜撰橋」の向こうから興盛寺まで移動する。

③ 興盛寺大雄殿では茶葉が入れられた茶壺を仏典にあげている。行列によって有名

な水が興盛寺本堂に移されれば、「茶壺封切りの意識」が始まる。興盛寺主旨僧に茶壺が渡されて、与えるのはそのかめを羽毛を縛って作った雨(羽)で清潔に掃いて、意識をあげるための動作で見せてくれる。そして、小刀(小柄-カッターのような)で茶壺の棒を切る。棒を切る時は一度に切るのではなく丸い靴部を3回に分けて、間に小さな刀を入れて切ってまた同じ方向にかめを回し、同じく3回で分けて切る。

④ 茶を粉碎してギョックブルする手順。チャイブを取り出して石臼で移す。このお茶の葉は年初に取ってかめに封じて保管したものである。石臼にかける時も5分位かけてゆっくり粉碎する。このような意識は、一つ一つの動作が静と動で分けられていて非常に意識的で清潔で厳肅に進行される。チャッサバルに粉のお茶を入れて遂にウジガングですくい上げた水を注いで茶は表千家の千種室家元(「裏千家の千宗室(せんそうしつ)家元」)履行する。そして撃拂した建仁寺から来たお坊さんによって仏典に捧げる。

⑤ 興盛寺門の前には茶筌塚と言う場所が用意されており、茶人たちが1年間使って鈍くなった茶筌を持って来てこの茶筌塚で供養する。参加した茶人たちの持って来た次善が非常に多い。関係者が茶筌塚を供養して意識を全体的に仕上げる。そして橘島ではお茶飲みコンクールと茶品評、茶種クイズなどのイベントなどが行われる。

62年前から毎年行われている宇治茶祭りは、毎年10月の一番目日曜日に行われている。まず宇治茶祭りは3人の偉人のための献茶のために行われる。日本の鎌倉時代に

中国からお茶を持ち帰って来た栄西、現在まで伝え受け継がれている茶道の先祖と言う千利休、日本で初めて茶園を作った茶の種子を宇治に持って来た明恵禪師に宇治茶祭りを通じて感謝と供養を目的にしている。栄西禪師、明恵上人、千利休の3人の茶祖及び茶行先地部処の魂を供養する。同時に茶の史蹟保存と宇治茶の振興をはかるため、毎年10月上旬に宇治橋周辺で行われる日本茶祭りの3大祭りの中で最高の席を固めるようになった。

3. 宇治茶祭りの争点と志向

1) 宇治茶祭りが志向する祭りの精神性

宇治茶祭り以外にも日本の茶文化政策をのぞき見れば、①千利休が作り茶生活をした茶の間を国宝と指定保存することで自国の茶文化精神を広く知らせて、茶文化を享有する人々が千利休の茶情神を崇尚する教育の役目の代わりをしている。②韓国と比べると千利休は草衣禪師のような人物である。茶文化はつましく楽しまなければならないというわび情神を主唱した人物が茶生活をした現場を国宝と指定しておいたというのだ。③千利休の茶の間を国宝と指定して国家的次元で管理して茶の間を訪問する人々に感動と共感を、迎える人々に愛着と自慢を作り出す。④「茶と徳」、「茶と精神」、「茶と教育」、「茶と観光」の分野では、誰にも負けないオンリー・ワンの世界を目標にする。⑤町(面)単位の小さな地域で、未来を農村と都市が限りなく接する時代という認識で、環境意識に目覚めた、ブランド意識が高い、個人重視の成熟社会を志向

する。⑥大山岐、宇治のように地域の個性を守るために遺物、遺跡を発掘してその精神を信奉した地域作りをおこなう。⑦茶文化を通じて文化を広げることと同時に、のびやかな空間やウエルビーイングやファースリングが大勢な現代社会で現時代に切実に要求される情緒的安定を探することができる時間を提供する。それらによって茶文化の感動と共感という満足を提供して社会に貢献すること、またそれを人生のやりがいと目標とするのである。

2) 祭り開催のための地域共同体の役目と活躍

宇治は典型的な茶生産地域の場所をいかして自然と調和する都市雰囲気造成と宇治茶祭りの精神を通じて現代人たちに昔のことに対する郷愁と旅行で感じる感性指数を十分に刺激するアイテムで、文化観光の成功的事例を見せてくれる。茶の貢茶記録を誇らしく思って地域の住民たちが合心して共同で祭りを主観して茶青年会や茶会などの参加を誘導して自発的に祭りに動員される共同体精神を見せてくれる。

茶祭りその中心イメージに集中して運営する方式が日本内でも3大祭りであり、また世界の祭りで発展することができる原動力である。行事は本舞台と相当な距離(通り)がある所に設置して二元化する方法も祭りをもっと厳肅にさせる要因である。茶商品を高級化して高付加価値を新たにつくるために最高の商品開発、最高の価格で販売、共同生産共同分配の標準化の中で稼働される地域ブランド企業と言える。地域家たちが集まって一つの共同体を一つの祭りアイ

テムを新たにつくって運営する姿が印象的である。地域に住む一人一人が地域での日常の生活を楽しむ中に、外からのお客さんを暖かく迎え入れることができる《豊かに輝く茶祭り》を目標にした、地域茶文化祭りである。

宇治茶祭りは豊かな自然環境を大切にするしながら村共同体が参加して茶生産地としての位相を高めて先代茶人たちの位牌と祭祀をすることで茶情神を仰いで行く行為が世界茶祭りに背伸びする足場である。昔のことを保存して開発して日本の歴史と観光地としてたゆまぬ関心と努力が覗き見える。

宇治を含んだ京都は日本歴史で長く中心都市だった所で、隣近の大阪、奈良、神戸などと接していて接近性が良いということも見逃すことができない。「大阪城」は豊臣秀吉が限らない実戦の経験をいかして、長年の歳月と心血を傾けて築城したことで、豊臣秀吉も日本の代表茶人と言える。このような地域の歴史文化資源を活用して観光資源化させた所で持続的な保守及び維持、管理を通じて歴史文化資源を保存してこれら地域と縛って一つの観光圏を形成している。

近隣に茶筌を作っている伝統村として韓国の潭陽とそっくりな高山茶筌村を引き継いでいる。伝統家屋たちがたくさん保存しており、茶人口の観光が増えて茶筌展示館を建立して茶の間とともに運営される空間は専門茶人たちに茶会を開くことができるように教育と体験が可能な空間だった。また称名寺は日本の3大茶人の中に村田珠光を仕えた所で有名なお寺である。このような茶関連観光地を連携して現在も農村地域

として村飾りが進行 중이다。住民たちが自発的に団結して村飾りをしているという点と村飾りがまだずっと進行中という言葉にたゆまぬ関心と努力、協同的な姿が印象的だ。風かぜもなく暖かい町内のイメージと日本の昔の姿をそのまま再現したイメージが観光客たちには興味の種である。

上記で見た宇治茶祭りの争点と志向を整理すれば次のようになる。

- ①茶産地と茶文化の精神を信奉する茶文化傳承の代表的地域という点。
- ②茶聖を仕えてその献茶制を奉行する手続きが中心になるという点。
- ③興盛寺というお寺周邊で行事が進行されるという点。
- ④宇治茶祭り実行委員会が皆地域の茶人たちに構成された団体という点。
- ⑤行事手続き過程の中にお茶と水の関係を重要視して豊臣秀吉常に茶物で使いながらお茶と水の不可分の関係を重要に思った精神を高く奉じて献茶礼を奉行したつける点。
- ⑥日本茶文化に大梁柄である茶人の精神を高く奉じてその精神を受け継いでいるという点。
- ⑦その年に帰った茶人の遷都茶礼祭をあげるという点。

4. 韓国茶文化祭りの問題点と方向性模索

茶礼は茶の間と茶道でなどの物質的な要素、お茶を飲む方法に関する行為的な要素、茶道に係わる美意識を土台で禅的境地を追い求める精神的な要素など3種要素で構成されている。すなわち茶礼はこれらの要素を煮って粹にガクオがであり楽しむ一種の

精神的な遊戯活動、すなわち趣味活動と言える。趣味は人間の特性の一つとして趣味がなければ人間生活は潤沢でもなくて楽しくもない。」人臭い生活で趣味活動と言うのは除くことができない貴い生的一种方式でもあったことだ。このように茶生活を勧奨するための茶文化祭りとして日本を代表する茶の精神的な要素を強調する地域である。

それなら韓国の茶文化祭りが現在抱いてある問題点は何なのか把握してその方向性を模索しようとする。創造的茶文化祭りを推進するために法鼓創新して地域の茶文化の独創性を掘り出さなければならない。創造性と言うのは茶礼が追い求める精神的価値と美学が表出される過程を通じて具現されて固定された茶道様式の厳格な維持といっしょに新しい様式の創案と普及は大衆社会に発生された新しい茶道需要を吸収することができる方案でもあったことを論議の対象とするのである。

先代茶人たちの精神を育てて受け継ぐ事に重点を置く事が韓国茶文化祭りの原動力になるでしょう。その他地域の茶文化祭りととは弁別力があって差別化される地域特有の茶祭りになるためには固定観念を捨てる果敢性が何より必要だと言える。このような行事全般に対する大幅修正は多くの時間が必要だろう。地方自治体との支援問題また開催を主催している団体の共同開催問題など先決されない問題があって難しさが随伴されるが本当チャゾングシンを信奉して主題意識を広く標榜する方法なのかその代案を深刻に悩まなければならない時点だと思う。草衣禅師の茶情神である中正と正行儉徳を守って広く知らせる事に最善をつく

す事である。

5. 結語

以上のように宇治を対象として日本茶文化祭り現場の動向と争点をよく見た。高麗人宗時宋の国使臣で朝鮮半島を訪問した徐兢(徐兢 1091～1153)が記述した『高麗圖經』から'接賓茶礼禮'という題目で詳らかに紹介されている行茶手続きとまったく同じ形式の作法が日本京都の建仁寺と上国寺で千余年以上伝わっているという点を思い出して見る時、韓日両国の茶文化研究は非常に至急だがまだ圓滑することができずに研究進行も不振な実情である。このような茶文化研究を促進して文化習合と文化変動を研究する事は非常に鼓舞的な作業となる。日本の茶文化祭りの一例を現場調査を通じて韓国の茶文化発展をはかる事は可視的に現われなければならない作業の一環である。日本をそのまま固守する文化志向は止揚されなければならないが、伝統茶文化の発展をはかるために作業が先行されなければならないことは重要な問題である。

この研究のため、2012年の宇治での調査は韓国茶文化の先決問題解決策を提示した。大山岐は豊臣秀吉が大山岐城を建築してからますます盛んで商人や無事など多い人々が訪問した。その中でも商業のみならず文化面でも多くの功績を残した。特に千利休は茶道を通じて時代の権力者たちと関係を深くして以前から交流があった大山岐町に待庵を建築した。大山岐妙喜禪庵で日本の茶道を定立受け継いだ千利休が最初で躍り口を作って使った国宝茶の間を見学した。朝鮮時代草庵茶の間の影響を受けたと言う

待庵だと言う茶の間は千利休のわび情神を感じることができる茶の間として日本茶の間の典型的なイメージを盛っている。大山岐資料館では待庵をそのまま再現しておいた。実は国宝茶の間は接近が禁止されていてこちら資料館で待庵の茶の間をもっと詳細に見られる。茶の間はありのままの自然条件をいかして茶情神だと言える和敬清寂のメッセージを盛っている。

宇治の茶祭りは現在韓国の茶文化祭りが抱えている諸般の問題点を把握するのに参照的資料になることと考えられる。日本宇治茶祭りの事例をモデルにして充分にベンチマーキングすることができる代案を提示する。宇治茶祭りは開催初期には住民皆が同参したのではなくリーダーたちが優先的に運営してその姿を見てますます規模を確張したし現在の姿に変貌した。

参考文献

- 1.『茶神伝』と『東茶頌』。
2. 宇治市史。
- 3.<3.意見交換より>、平成21年度第2回宇治市食育推進計策定委員議事、-宇治市。
- 4.『宇治茶名所から製茶へ』、宇治市史資料館、1985。
5. グアックウィジン、『海南の茶文化』、海南新聞社、2008。
6. ギムギュヒョン、<茶と茶礼>、『ソウル六百年史』3冊、ソウル特別詩編、1979。
7. 金大星、『茶文化遺跡踏査記上、中、下』、仏教映像会報社、1994。
8. _____、『東茶頌』、東亜日報社、2004。
9. ギムドだけ、『東茶頌・茶神伝』、太平洋博物館、1982。

10. 金人盃、『茶道学』、ムンソングサ、1998。
11. 朴銓烈、「日本茶道の文化産業的意味に関する研究」、『韓国茶学会誌』13冊2号、2007。
12. 『京都府の茶業』、京都府部蠶茶業課。
13. 「宇治茶」の産地表示で自主基準、京都府茶業議所、京都新聞、2004、3、25。
14. 異制庭訓往。
15. 吉村亨、『宇治茶の文化史』、宇治市育委員、1993。
16. 『山城お茶の100年』、京都府立山城土資料館、2000。
17. 堀井信夫、『宇治茶を語りぐ』、アスワク、2006。
18. 精敏、『新たに使う朝鮮の茶文化』、ギムヨンサ、2010。
19. 『宇治茶大好き!』、京都府茶協同組合。
20. 情緒頃、「全南海岸地域セラミックスロードの文化観光産業化方案研究」、『2012 第3回の前グックヘヤングムンファ学者大会資料集3』、木浦大学図書文化研究員、旅愁地域社会研究所、私は南台地域社会発展研究所、2012。
21. 熊倉功夫、『近代奇者の茶の湯』、河原書店、1996。
22. 山城茶業組合、『山城茶業史』、268項、山城茶業組合、1984。
23. 中筋丈夫、『飄の』序から @ 洛南タイムス' 2005、3、12。
24. ゾングヤングでは、『茶道哲学』、ノロックバウイ、1996。
25. 京都宇治情報お茶の水屋。
26. <宇治で遊ぼう>、京都新聞、2004、3、25。
27. 大石貞男、『日本茶業達史』、農山漁村文化協、1983。
28. 催係員、『うちの茶の再照明』、三陽出版社、1983。
29. ヒョンヨン組、「韓国伝統茶文化空間に関する史蹟考察 - 古文献を中心に -」、『韓国茶学会誌』、6冊3号、韓国茶学会、2000。